



4月になり、いよいよ新年度が始まりました。先週の木曜日には、ゼミ生全員と先生で長野市城山公園に花見に行き、満開の桜を堪能しました。

3月に4年生が卒業し、3年生が4年となり、新3年生7名も図書館の受付に加わります。まだまだ慣れないことも多いかもしれませんが、あたたかく見守っていただけたら嬉しいです。これからも、皆様と一緒に楽しい時間を過ごせたらと思っています！



Topic 01 第4回イベント、開催しました！

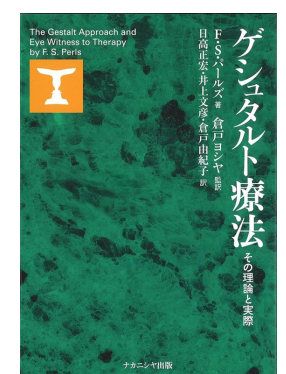
2025年3月15日に、第4回目となるイベントを行いました。今回のスピーカーは、本棚オーナー様の介護福祉士とDJ、農業の松木信治さんで「本棚は地球を救う?!」介護・DJ・カウンターカルチャー —読書を巡る私の放浪—」をテーマにお話ししていただきました。今回は、本棚オーナーの山下さん、青木さん、杉山さん、まちづくり長野の宮島さん、学生4名（zoom参加2名）、築山教授、松木さんを入れて計10名での開催となりました。

「早熟で、驚くような小学生時代の読書体験!!」

松木さんは、長野市中心市街地、権堂アーケードから歩いて一・二分という権堂田町生まれの町っ子。おませな松木さんは、お友達と相容れなくて、小学校時代は図書館を居場所にして読書三昧。図書館は小学生にとっては異空間であり、どこかここじゃないところ＝異世界への憧憬であった。図書館で先生から頂くお抹茶とお菓子が楽しみだった。

その頃の愛読書は、佐藤さとる『だれも知らない小さな国』。全巻集めて全巻を読み、作者に手紙を書いて、サインをもらう生意気な小学生。コロボックルという妖精が活躍する物語。SFジュブナイル（juvenile）という、子供も読めるSF小説を読み、アガサ・クリスティやエドガー・アラン・ポーなども読んだ。その頃、アトピーに苦しみ、何とかしたいという気持ちでいっぱいだった。当時の治療は、ステロイド剤を塗るだけで、塗った時は大丈夫だったが、だんだんひどくなり、薬では治らないのではないかと考えているうちに、ある本に出合った。小学生が読むような本ではないが、『別冊宝島16 精神世界マップ』。精神世界関係のガイドブックで、これを手にして、ここに答えがあるかもしれないと思って読んだ。仏心理学者であるエミール・クーエ（Emile Coué：1857-1926）の催眠療法について、薬や施術ではなく、自己暗示によって治癒する方法などが書かれていて、中学から高校に入る頃には、ゲシュタルト療法でできるのだと分かった。催眠療法をやっている医者も身近にいないので、ゲシュタルト療法などの本を買って読み、自分なりにやってみると、アトピーは治ってきた。その頃、漠然とこれを自分の一生の仕事にしたいと思うようになった。

読書は、松木さんを異空間へ誘い、病気を治癒するまでになったのである。誠に驚くような読書体験である!!

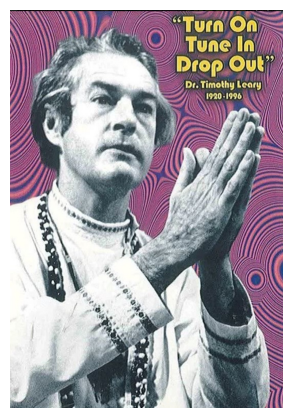
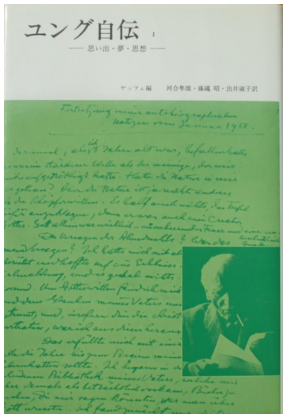
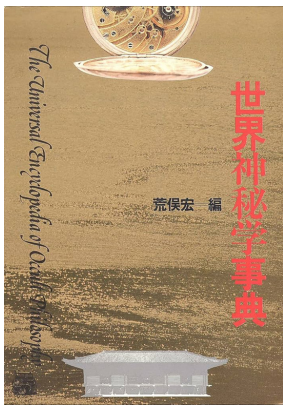


「ユングとの出会い、衝撃的な1989年という年、そして、イギリス留学へ」

さらに、荒俣宏編『世界神秘学事典』平河出版社、1981年に会う。日本の神秘思想や魔術などについて書いてあり、科学も元を突き詰めると錬金術だなど、子供ながらにワクワクしながら読む。知らないことがたくさんある。学校で教えないことがいっぱいあると思うようになり、これはもう日本にいる場合じゃないと思うようになる。その頃に、カール・グスタフ・ユング（1875－1961）に出会う。ジークムント・フロイト（1856－1939）の弟子。子どもには難しすぎたが、東洋思想に近い。ユングの自伝を読むと、愛人をつくったり、東洋思想にかぶれたりという側面もあった。当時は、直ぐには留学できなくて、イギリス政府によるブリティッシュ・カウンシルで英語を学んだ後に入学許可が出た。高校三年の途中で東京に出た。東京暮らしは楽しくてしょうがなかった。1989年だった。東京青山に、精神世界の本専門の「ブッククラブ回」という書店。そこで出会ったのが、ゲオルギイ・イヴァノヴィチ・グルジエフ（1866-1949）。グルジェフ・ワークという瞑想、ダンス、音楽、生活様式に傾倒した。飯田橋に住んでいた。5歳年上の兄は、同じ東京で、CMなどもたくさん作るイケイケの売れっ子映像アーティストとなっていた。

東京には、小さいディスコやマニアックなクラブがたくさんあった。そんなクラブは、午前1時などの真夜中から始まるので、時間をつぶすのに、六本木のABC（青山ブックセンター）の常連となった。そこには、ペヨトル工房が作る、『夜想』、『銀星倶楽部』、『EOS』、『WAVE』（西武と共同製作）、『Ur』など幻想文学や映画、演劇、音楽等の芸術全般に関する先鋭的な雑誌が当たり前並んでいた。そこには、「フィリップ・K・ディック」の特集が組まれた雑誌が並んでいた。長野から出てきた自分にはとても刺激的だった。こんなことが起きているんだと思った。勉強したいと思った。ヴィトゲンシュタインが特集になるんだと。バブルの余波でお金があって、「ET PLUS」という大きなフリーペーパーがあって、そこに、ティモシー・リアリー（1920－1996）の特集があった。ハーバード大学教授で、カウンターカルチャーの教祖的存在だった。科学的に作ったLSDは、当時は合法で、幻覚剤による人格の再構成を研究していた。

1989年は、世界が変わるのではないかなと思うような事件が起きた年だった。1月には天皇が崩御されて、昭和が終った（今年は昭和100年である）。6月には、天安門事件が起きた。ティモシー・リアリーがFAXで天安門事件を世界に発信した。当時は、インターネットもメールもなかった。世界中のどの表紙も、天安門事件のものだった。MBMAという麻薬は、欧米で禁止になるが、日本では禁止とならなかったの、ニューエイジトラベラーと言われる人たちが東京に集まった。ヨーロッパでは、1960年代後半のヒッピー・ムーブメント「サマー・オブ・ラブ」の再来と言われたセカンド・サマー・オブ・ラブというダンス・ミュージックのムーブメントが起きた。デビット・ボウイが、東ドイツに聞こえるように、「ベルリンの壁」ギリギリでコンサートを実施していた。そして、「ベルリンの壁」が11月に崩壊した。ドキドキわくわくして過ごしていた。130万人のラブパレードがベルリンでおきた。イギリスに行きたい。親に学費を出してもらおう方便として、チューリッヒのユング心理学研究所で勉強したいが、ここにはいるには、日本の大学で学ぶより、イギリスの大学で学ぶ方が近道だと説得した。アメリカは日本中に溢れていた。とにかく、イギリスに行きたかった。



「イギリスの大学での挫折、自殺願望と、インドへの放浪」

イギリスのレディング大学に留学。あれもこれもと、心理学とコンピューターサイエンスのダブルメジャーを専攻。一日6コマ、7コマ。予習・復習が大変で寝る暇もなかった。その上、心理学は理系で、計算式ばかりで、思っていた内容と違った。大学寮にはパブがあって、一生分のアルコールを飲んだ。少しして、レディングは田舎だから（レディングはロンドンから電車で約25分）、ロンドンに引越した。ロンドンから通ったが、大学に行くのが嫌になった。テロで電車がよく止まったのを理由に、大学に行かなくなった。大学生活がうまくいかない、当時同棲していた彼女ともうまくいかない、夢が大きく崩れてきた。

テムズ川の橋の上から何度も飛び下りようと思った。そして、ある時、この橋から飛び降りても死なないな。でもたくさんの人に迷惑をかけるな、喧嘩している彼女にもまた会わなければいけない、何も変わらないということが全部見えた。そこで、飛び下りるのを止めた。どうせ死ぬなら、やりたいことをやってから死のうと思った。それで、貧民窟に引越した。6か月か7か月住んでいた。真夜中に銃声があったり、サイレンがあったり、同じフラットにいる人が警察に捕まったりした。映画も好きだったので、『タクシードライバー』のロバート・デニーロのように、モヒカン刈りにしてみた。そして、子どもの時に見ていた、神秘思想の舞踏を見なくなった。最も見たかったのが、グルジェフ・ワーク。どこで習えるか調べたら、バグワン・シュリ・ラジニーシ（1931-1990）というカルト教祖が、アメリカで信者を集めた後で、インドで信者を集めたコミュニティを作っていた。その村に潜入した。既に、ラジニーシは死んでいた。皆、健康食を食べ、お酒も飲まなかったが、信者ではないので、インドの美味しいビールをまた一生分飲んだ。インド南部の神智学協会にも出向いた。そんな時に電話があった。

「祖父の死と介護の出会い、介護・DJ・農業の平行な生き方へ」

阪神大震災の前の日に、祖父が亡くなった。自分が死のうと思っていたのに、祖父が死んだ。留学を応援してくれた祖父だった。帰国して、お葬式に参列。そこから、介護が始まった。お祖父さんが介護していた寝たきりのお祖母ちゃんの介護を引き継いだ。土日は自然農法で農業、月曜日はDJをやった。月：DJ、火水木金：介護、土日：農業。農業は、安曇野にある舎廬夢（しゃろむ）ヒュッテで、パーマカルチャーを学び、新しい生き方や農業を学ぶ「ビーグットカフェ」というワークショップの事務局を担当した。

北海道洞爺湖町入江貝塚という約4千年前の縄文集落跡から、「筋ジストロフィー」を患っていた成人の骨が見つかった。それは、4千年前に人類が介護をしていた可能性があるということ。誰かをケア（CARE）することが、私自身のコア（CORE）：生活の根本に近づいている。ケアとは人間の本質だとマルチン・ハイデッカーが言った。お金の目盛から命の目盛へ。資本主義から介護主義へ。介護の力は世界を変える。半径1.5mの小さな世界。介護も農業も、人が生きることも実はこの半径1.5メートルが基本であり、そこに本があれば、世界と繋がる。本は地球を救う。本に救われて今がある。改めて本の力を感じた、素晴らしい講演でした！



本を書いたら

山下勝也

「本を書く」平凡な生活を送っている限り、まず縁の無いこの言葉と最初に出会ったのは今から40年程前、定年退職した父が「自分史を書く」と言い出した時です。そのころ自分史を書くと言えば、一代で財をなした成金か頂点へ上り詰めた政治家位で、眼の色を変えて売上を競う出版社が無名の一個人など相手にする筈も無く、無念の涙で諦めざるを得なかった父の姿が記憶に残っています。

だが時は流れSNSや電子書籍が台頭して活字離れが進んだ現在、売れなくても一定の収益になる自費出版の希望者は上客となったのでしょうか。私が昨今書き留めた文章を持って恐る恐る出版社を訪ねると、手順や方法など様々な支援とともに懇切丁寧に上梓へと導いていただきました。

今手にしている本の形になった文章は、ファイルやバインダーに綴じられていた数ヶ月前からは、想像さえ出来なかった全く別の雰囲気醸し出しています。そしてその本が持つ質感・重量感は今まで味わった事の無い満ち足りた充実感にあふれているのです。..これが本を書いた達成感なののでしょうか..

今、私の中では「この喜びが軽自動車ほどの出費で味わえるのだから免許を返納したら次々と..」などと、次の作品に向けて捕らぬ狸に化かされたような皮算用が始まると共に、春に草木が芽吹くが如く様々な構想が萌え出しています。

そして本を作ろうとしたときには夢にも思わなかった「誰かに読んでほしい」という願い。出版社に聞いた所「書店に並べ販売するには二冊出版するより掛かる」と言われ諦めていましたが『まちかど図書館ぼたん』さんの話を耳にし「これは何かの縁に違いない」とオーナーになった次第です。

ちなみに本を書くのは簡単です。短歌集を見てお気付きと思いますが、一つの歌の解説を起・承・転・結各百字ほど、計四百字位に書いてワンユニットを作り、それをバインダーノートに綴じて、前後を見ながら書き足して行くと原稿に成長します。

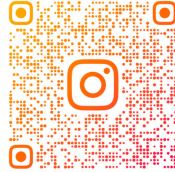
Topic 03

開館時間について

ホームページ



Instagram

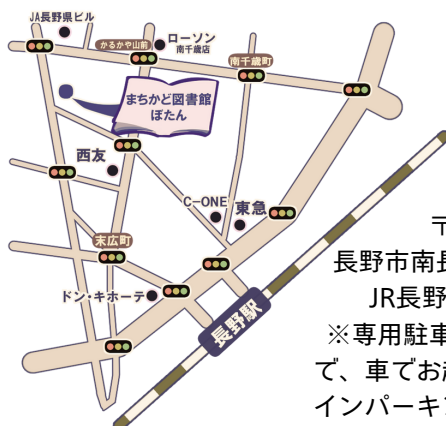


開館時間は10時から18時までですが、ゼミ生と教員が店番をしている関係で、その時間内で、可能な時間に開館しております。詳細はホームページまたはInstagramで確認をお願いいたします。

URL:<https://machinakabotan.com/www.machinakabotan.com/>

Topic 04

アクセス



〒380-0826

長野市南長野北石堂町1185-6

JR長野駅から徒歩7分、

※専用駐車場はございませんので、車でお越しの際はお近くのコインパーキングへのご駐車をお願いいたします。

2025年4月24日発行

編集：長野県立大学 グローバルマネジメント学部 築山ゼミナール

住所：〒380-8525 長野市三輪8-49-7 B309研究室

Tel：026-217-2241（代表） fax：026-235-0026

E-mail：tsukiyama.hideo@u-nagano.ac.jp

つめる・広める・ホコミュニティ！
まちかど図書館
ぼたん